

平成 2 4 年 5 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

彫刻家朝倉文夫と松野伍秀

沢井 3 丁目、楓橋近くの川畔に立つ「青年の像」は日本を代表する彫刻家朝倉文夫の作品です。この像は朝倉文夫が昭和 20 年、二俣尾 5 丁目の高源寺に疎開していたことから、昭和 39 年に建てられました。明治 16 年、大分県に生まれた朝倉文夫は東京美術学校を卒業、彫刻家として数多くの作品を制作しました。昭和 23 年には文化勲章を受章しています。写実性を重んじる作風から偉人の銅像に秀作が多く、代表作には、旧東京都庁前の「太田道灌像」、早稲田大学の「大隈重信像」などがあります。

朝倉文夫に青梅への疎開を勧めたのは、内弟子で梅郷に住んでいた松野伍秀でした。

西分町 3 丁目、青梅織物工業協同組合の前庭には、朝倉文夫と松野伍秀の作品が並んで建っています。左側は「井上倉吉翁壽像」で昭和 4 年、朝倉文夫が作成しました。右側は「田中孫次郎翁像」で昭和 26 年、松野伍秀の作品です。

井上倉吉は慶応元年、千ヶ瀬村に生まれました。青梅織物業を組織化、明治 38 年青梅織物同業組合の設立に尽力し、初代組合長となった人物です。大正 13 年には緑綬褒章を受章しています。昭和 3 年、64 歳で引退を表明しました。組合では、長年の功績を顕彰



青梅織物工業協同組合前庭に建つ㊦朝倉文夫作「井上倉吉翁壽像」㊦松野伍秀作「田中孫次郎翁像」

するため、銅像の作成を朝倉文夫に依頼しました。田中文吉著『回想九十年』（昭和 57 年発行 日経事業出版）にはその当時の様子が次のように書かれています。

“製作が終わる頃、組長の孫次郎ら倉吉氏のお供をして朝倉先生の工房へ伺い塑像を拝見した。「なるほどよく似ていますが、なんだか少し若すぎるような感じですねあ」誰かが無遠慮なことを口にした。すると朝倉先生は本人と塑像を見較べて「少し若いかな」とおっしゃって指先でほんの一撫ですると、「やあ、こりゃそっくりだ」と皆が歓声をあげるほど、倉吉さんに生き写しになった。後々まで語り草になったことである”

しかし、この銅像は戦争中供出の運命に遭い、戦後、台座だけが残っている状態でした。銅像復元のきっかけとなったのは「田中孫次郎翁像」でした。昭和 24 年、田中氏の銅像作成計画が持ち上がった時に、「井上倉吉翁壽像」を再び朝倉文夫に依頼しました。朝倉文夫の作品は、戦争中 400 点余も供出され消滅してしまいましたが、アトリエが戦災をくぐり抜け、幸い原型は 300 点余残っていました。井上氏の型も残っており、見事に復元されました。

田中孫次郎は明治 9 年、上長淵村に生まれました。井上倉吉の従兄にあたる人物です。昭和 3 年、青梅織物同業組合二代目組合長に就任しました。その後、青梅織物工業組合を新たに設立し、理事長として昭和初期の輸出綿織物生産に活路を見出しました。戦中、戦後の混乱期を乗り越え発展していった青梅織物業の礎を築いた偉業を讃え、昭和 26 年「田中孫次郎翁像」は建てられました。台座背記には「朝倉文夫先生高弟松野伍秀先生に乞ひ師の監修をも加えて翁の胸像を建つ。今その温容を仰ぎては嘗て世に御座せし翁の風丰を偲び転た欽慕の情に禁へざるなり」と刻まれています。

2 点の銅像は同じ高さ、台座も同じデザインで、師と弟子の深い絆を感じることができる作品です。

今回のニュース作成にあたり、茂木耕之助氏にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

（文責 小島 みどり）